特集「新たな歩み」

若い力の「新たな歩み」

「お寺や浄土真宗のみ教えに触れてもらいたい」と、若い世代の人たちが、これまでの寺院活動の境を超えて、新たな活動に積極的に取り組んでいます。女子高生グループや臨床宗教師、ヒーローショーなどジャンルも形もさまざま。若い力の「新たな歩み」を特集し、相愛大学（大阪市）の釈徹宗教授に「新たな歩み」の意義について語ってもらいます。　（5～7面で特集）

NUM―NUM GIRLS

「ナモアミダブツのよろこびを君に」

女性アイドルグループのように、歌って踊って演技して、各地の寺院などで「高校生の私が出遇ったお念仏の喜び」を等身大で表現する現役女子高生グループ・ナムナムガールズ。

彼女たちは、宗門校の東九州龍谷高校（大分県中津市）の聖歌隊・宗教部の有志。10月までキャプテンを務めた東陽香穂さん（2年）は「宗門校で仏教に出遇っていく私たちの姿をそのまま表現している。この活動で私自身が、浄土真宗をより深く知ることができた。ナムナムガールズは最高！」と笑う。

「ナ・モ・ア・ミ・ダ・ブ・ツ♬」と明るく歌い、日常の悩みや苦しみが、仏教によって転換されていく様子を爽やかに伝える彼女たち。顧問の紅楳聖教諭（41）は「アイドルソングのようにリズムに乗れて耳に残りやすい曲なら、若者でも南無阿弥陀仏と歌うようになるのでは。高校生から高校生、高校生からお年寄りへ、逆転の発想で全世代にご縁をつくっていきたい。全国にナムナムガールズやボーイズが増えると楽しい」と語る。

ブリッジングとしての動き

釈　徹宗

1961年生まれ。相愛大学人文学部教授。専門は宗教学、比較宗教思想。
大阪府池田市・浄土真宗本願寺派・如来寺住職。

今回の特集で取り上げられている活動は、情報系・サブカル系・芸能系・居場所づくり・他者への寄り添いなど、多岐にわたっています。ですからひとくくりに論じることはできませんが、いずれも「境界を超えようとする姿勢」は共通していると言えるでしょう。

このような動きに対して、「もっとみ教えを伝えようとすべき」「社会の風潮への迎合」「浄土真宗のご法義からはずれている」「きちんと仏法を説くのが本来の姿であって、こんなやり方は間違っている」などといった懸念や批判があるかもしれません。しかし、領域と領域のインターフェイス（境界面、接触面）だからこそ生まれるものもあります。ですから私はこういった取り組みを評価したいと思います。

最近、ソーシャルキャピタル論が注目されています。人と人との信頼関係に基づいた活動を、社会の資源として再解釈しようとする議論です。この中に、「ボンディング（結束）」と「ブリッジング（橋渡し）」という理論があります。より望ましい社会を目指して、この両面に取り組んでいくことが重要だというわけです。私たち真宗者も、この両面について取り組む姿勢が肝要だと思います。宗派や門信徒といったボンディングが大切なのは言うまでもありませんが、他領域とのブリッジングについても目を向けていかねばならないのではないでしょうか。

そして、他領域との橋渡しを考える場合、アートや芸能や音楽はとても重要な要素です。これらは領域をまたぐ能力、架橋する能力が高いのです。ですから、「ともしえ」や「ナムナムガールズ」といった芸能的な取り組みや、アート系の「消しゴムはんこ」などは個人的に注目しています。

（6面に続く）

仏教伝えるヒーローショー

仏教の教えをストーリーに盛り込んだ戦隊ヒーローショー「ジッセンジャー」。

ヒーローを誕生させたのは、宗門校の龍谷大学大学院実践真宗学研究科の学生僧侶たち。３年前にショーの内容を考え、コスチュームは手作りと思えないほどの完成度。演出に軽快なアクションを取り入れ、子どもたちのハートをわしづかみ。かっこよくて親しみやすい、仏教のメッセンジャーとなっている（写真）。

現在は３年生の高橋光慈さんが中心となって、各地の寺院や幼稚園で上演している。一般のヒーローショーと違うのは、敵を倒さないこと。ヒーローの「ビャクドー」と怪人の「ジャカツ」が登場するが、決着の前に必ずあるのが「相手の立場や考えの違いに気付かされる」というシーン。世の中で思い描く善悪の判断が必ずしも正しいわけではないという「気付き」を表現している。

問い合わせ・公演依頼はjissenjya@gmail.com

サブカルチャーからのアプローチ

「中景」分厚くする

絵画の構図に「近景」「中景」「遠景」という分類があります。「近景」は近くに見える光景、「遠景」は遠くの光景、「中景」は「近景」と「遠景」をつなぐ光景です。

この構図を援用して現代人の宗教性を考えてみると、「近景」は自分や家族の問題、「中景」は地域や文化や伝統的な様式、「遠景」は聖なる領域といったところでしょうか。日常生活から宗教的なものが遠く離れてしまいがちな社会です。しかも現代は「中景」がとても貧弱になっています。身の周りに宗教文化や宗教的な行為様式がどんどん枯れていっているからです。そういう意味では、現代人は地域の宗教文化や伝統的な行為様式なしに、直接宗教性へとアクセスしなければいけない状況におかれています。現代人の宗教が情報化・消費財化しているのも、地域や文化の様式が痩せているところに要因があると思うのです。

「近景」や「遠景」に比べて、「中景」が極度に痩せ細ってしまうのはやはりバランスがよくありません。「中景」も豊かな方がよいに違いありません。どうすれば「中景」を分厚くできるのでしょうか。いったん途切れた地域の伝統的な行為様式を復元することはとても困難です。そこで、アートや芸能といったものに注目したいのです。これらが中景を分厚くしてくれます。

あるいは、アニメや漫画やゲームなどといったサブカルチャーもあなどれません。これらは現代日本人の「中景」をかなり豊かにしています。若者はサブカルを通じて宗教性と出会っていますから。「ジッセンジャー」のようなサブカル系は、特定の世代ならではのものでしょうね。

（7面に続く）

お寺版〝脱出ゲーム〟

「日常の価値観から離れ、人生の問いに向き合う体験を創出しよう」と、本願寺派の若手僧侶と一般有志が「Toy×ボーズ」を名乗り、「謎解き脱出ゲーム」を作っている。通常の「脱出ゲーム」に、仏教の思想や世界観を加えたのが特徴だ。創作したゲームの一つ「地獄からの脱出」は、芥川龍之介の短編小説「蜘蛛の糸」をベースにした。参加者は、地獄から脱出しようと、さまざまな謎解きに挑戦するが、その過程で必ず「自分のあり方に向き合う」「日常に感じている感覚や価値観、また人生を自ら問う」場面に出くわす…。

「Toy×ボーズ」共同代表の佐藤慶樹さん(28)は「お寺に気軽に集い、ゲームを通して、『互いに許し合うことの大切さ』『目には見えない大切なもの』への気付きなど宗教の価値観を体験してもらいたい」と話す。

伝灯奉告法要でも特別版

伝灯奉告法要期間中は、ゲームを通して多くの人に本願寺と門前町に親しんでもらおうと、特別バージョンの謎解き脱出ゲーム「世界遺産　西本願寺ナゾトキケイカク～400年の歴史と文化があなたに問いかける～」を開催している(写真)。

次の開催は第５期（来年３月７日～14日の９時～17時）。500円のキットが必要。御影堂前のカフェ＆マルシェ「AKARI」受付で扱っている。

特集「新たな歩み」

寺院の外に踏み出し 人に寄り添い声に耳傾ける

20～30代集うボーズバー

法衣や作務衣姿の僧侶がカウンター越しや、テーブル席に赴き、グラスを傾けながら参加者と会話していく「ボーズバー」。お酒が入ると、会話も自然と弾む。参加者の口からは日頃の僧侶やお寺への疑問がこぼれる。

こんなボーズバーが北海道岩見沢市にある。〝開店〟しているのは北海道教区空知南組。お寺にご縁のない一般の人との「ご縁づくり」にと年４回開く。参加者は、フリーペーパーや地元紙、同組のホームページやフェイスブックなどで情報を知り、午後７時のオープンからわずか20分で満席になる人気だ。30代が中心、20代の姿も多い。

僧侶と一度話してみたかったという30代女性は「ここなら気軽に話せると思って来ました。お坊さんへのイメージが変わりました。お寺やお坊さんへの壁がとれた感じ」と喜ぶ。20代男性は「誰もが仏教に興味があるはず。こうしたきっかけがうれしい」と話した。また、「若すぎる」と感じた年配の参加者向けに別会場を設ける心配りも。

スタッフの辰田真弥さんは「後日、参加者からメールで、聞けなかった疑問や次回の開催問い合わせをいただいています」と手応えを感じている。髙橋宗瑛組長は「過疎化でご門徒が離れていく中、若い人たちにはお寺や僧侶との接点を持っていただきたい」と願いを話していた。

銀座でぶらりと

東京・銀座２丁目のデパートやオフィスビルが立ち並ぶ一角に、気軽に仏教に触れられる「築地本願寺ＧＩＮＺＡ ＳＡＬＯＮ」（写真上部：東京都中央区銀座２－６－４・竹中銀座ビルディング５階）がある。築地本願寺のサテライト・テンプルだ。

仕事帰りや週末の時間帯に開く「ＫＯＫＯＲＯアカデミー」（有料、一部無料）は、「こころ」「仏教」「教養」「終活」「体験」のカテゴリーで毎月約30講座を設けている。

また、仏事やお墓、人生相談まで僧侶に相談できる「よろず僧談」（無料）は毎週水・木曜の13時30分、14時30分、15時30分、16時30分）に開いている。

ＳＡＬＯＮの利用は会員登録（入会金・年会費無料）と予約が必要。問い合わせはＳＡＬＯＮ☎０３（６２６３）０４３０※10時～17時（月曜除く）。ホームページからも登録できる。http://ginzasalon.tsukijihongwanji.jp/

生活の中の浄土真宗文化

「これからは浄土真宗も社会のニーズに合わせていかねばならない」と主張したいわけではありません。社会の価値と対峙するところに宗教の本領があります。特に現代社会の消費者体質やビジネスモデルとは、がっぷり四つに組むだけの気概をもたねばならないと思います。

しかし、宗教と社会とのせめぎ合いの中、インターフェイス部分に生まれるものはとても大切です。逆に言えば、そのような創造的な動きがないのは、宗教としてのポテンシャルが低下していることになります。その意味では、今回紹介されている活動に対して生まれる「懸念の表明」や「批評性」も含めて、宗門の活気であると言えるでしょう。

以前、社会活動をしている他宗派の僧侶に「浄土真宗の人はどの領域に行っても必ずいますね」と言われたことがあります。とても誇らしい気持ちになり、同時に先人たちのご苦労がしのばれました。確かにさまざまな社会問題に取り組む人は少なくありません。それだけではなく、浄土真宗は日常生活の中にさまざまな文化をも生み出してきました。社会実践や商業倫理、あるいはお斎の食文化など、とても魅力的です。これらは必ずしも教義に裏打ちされていたわけではないのですが、草の根的に浄土真宗文化として花開いたわけです。

今回、新ご門主さまの（伝灯奉告法要の）ご親教には「念仏者の生き方」※というタイトルがつきました。浄土真宗の仏道は日常生活の中にあることを提示された内容でした。先人が創造してきた浄土真宗文化は、まさに「念仏者の生き方」の試行錯誤の中から生まれてきました。これからも新たなものが生まれ、消えていくことでしょう。その中から、真摯な取り組みのものが浄土真宗文化として血肉化していくはずです。

医療現場に立つ

岐阜県大垣市の沼口医院が開設するホスピス型共同住宅「メディカルシェアハウス・アミターバ」で、常駐の臨床宗教師として働くのは田中至道さん（28、岐阜市・浄慶寺衆徒＝写真右）。臨床宗教師は、被災地や医療機関、福祉施設など公的空間で心のケアを提供する宗教者をいう。東日本大震災を機に、東北大学で養成が始まり、宗門校の龍谷大学などにも広がりを見せている。田中さんは３年前、東北大学の養成講座を受講した。

活動の中心はシェアハウス入ってすぐの喫茶店「カフェ・デ・モンク」（同上）。マスターのようにエプロンがよく似合う田中さん。仲間の臨床宗教師とチームで、人生の最後の時をここで過ごす入居者、家族、時には訪れた遺族の話を、お茶を飲みながらゆっくり聞いていく。

「残された人生をどうすればいいのか」という苦しみを持つ人と向き合う田中さんの笑顔はやさしい。田中さんは「いろんな方の人生の最後の場に関わることができる僧侶であり続けたい」と自らに誓っている。

※専如ご門主のご親教「念仏者の生き方」は本願寺のホームページでご覧になれます。www.hongwanji.or.jp